

都市部の保育施設における 野草（雑草）活用の現状



1. 背景

- 日本の幼児教育における自然との関わりの目的（井上、2000）
→表現を変えながらも、以下の2点が公的文書で継続して示されてきた

科学性の芽生えを培う

豊かな人間性を育む

- 2017年告示の現行の『幼稚園教育要領解説』での観点

科学性の芽生え

- ・好奇心
- ・思考力

豊かな人間性

- ・自然への親しみ
- ・生命の尊重

- 新宿区立Q幼稚園での調査

→野草（雑草）は他の植物と比べ、保育者の活用意識等が低い

- 野草（雑草）は園庭に必要な環境の一つ

様々な草花遊
びが生まれる

季節の変化を
楽しむ

小動物と触れ
合える

『いのち』の
循環を感じる

(秋田ら、2019; 大豆生田ら、2022)

2. 目的

- ・保育者の園内植物の活用意識等について検討
- ・保育における野草（雑草）活用の現状を整理
→都市部の保育における、子どもたちの自然との関わりがより豊かになる一助になることを目指す

※野草（雑草）：保育環境のうち保育者が意図して植えていない、または当初は意図して植えたがその後は種子を作り自生している植物

3. 倫理的配慮

- ・新宿区立Q幼稚園には文書及び口頭で説明し、同意を得た
- ・東京都23区内の保育施設への調査については、倫理的配慮等を記載した文書を郵送し、質問紙への回答をもって同意を得たものとした（日本女子大学人を対象とした実験研究に関する倫理審査委員会により、課題番号 第572号で承認済）

4. 方法

| | 新宿区立Q幼稚園 | 東京都23区内の保育施設 |
|------|---|---|
| 対象 | 3～5歳児クラス各担任と主任（計4名） | 公立・私立幼稚園、保育所、認定こども園のうち無作為に抽出した349園に配布※ |
| 実施時期 | 2021年7～11月 | 2023年2～3月 |
| 内容 | ①質問紙：園芸植物と野草（雑草）のうち20種の認識と活用意識に関する5点の質問 ②半構造化インタビュー：植物の活用に関する7点の質問について、井上（2009）が提示している視点を参考に5つに分類し考察 | ③質問紙：野草（雑草）10種に対する、保育者の認識と活用意識、実際の子ども様子などについて（郵送またはGoogleFormsにて回収） |

※③東京都23区内の保育施設への質問紙

本研究は回収できた質問紙のうち、園庭のある58園を対象とする

| | 幼稚園 | | (認可)保育所 | | 認定こども園等 | | 合計 |
|----------|------|------|---------|------|---------|------|------|
| | 公立 | 私立 | 公立 | 私立 | 公立 | 私立 | |
| 実態(園) | 129 | 489 | 542 | 2167 | 43 | 71 | 3441 |
| 送付(園) | 12 | 52 | 56 | 220 | 3 | 5 | 349 |
| 回収(園) | 8 | 18 | 9 | 45 | 1 | 1 | 82 |
| 送付対比率(%) | 66.7 | 34.6 | 16.1 | 20.5 | 33.3 | 20.0 | 23.5 |

回答園の園庭の有無

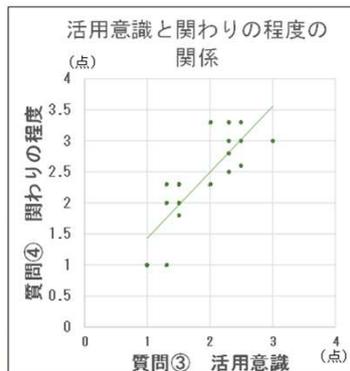


5. 結果

質問紙（新宿区立Q幼稚園）

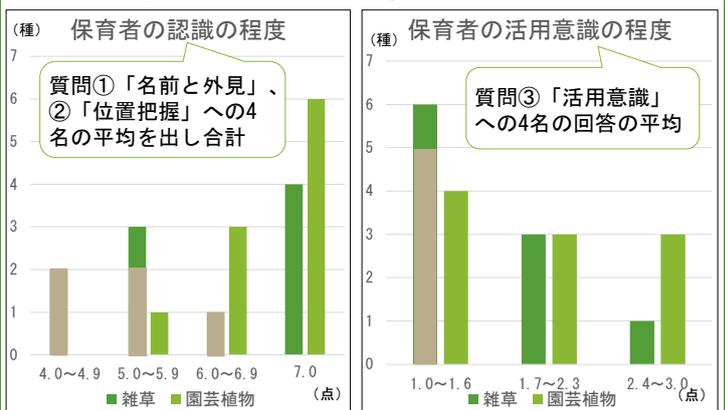
- ・園内の多くの植物の名前と園内における位置を把握
（「名前と見た目を知っている」71.3%、「園内のどこにあるかわかる」92.5%）

- ・保育者の活用意識と子どもの植物への関わりの程度に関連あり（右図）



※グラフの数値の算出方法：例えば質問③なら、活用意識の程度が高い内容の選択肢ほど数値が大きくなるように1～3の点数を付与し、植物種ごとに4名の平均を算出

- ・園芸植物と比べて野草（雑草）は認識や活用意識が低く、中でも花や実の形状や色が特徴的でなく目立ちにくいもの（図中の茶色部分）はその傾向が強い



5. 結果

半構造化インタビュー（新宿区立Q幼稚園）

- 特性による活用や意図の違い

〈栽培植物〉

- ・食育
- ・大切に思う気持ちを育てる

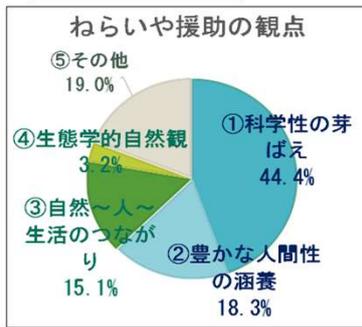
〈園芸植物〉

- ・興味関心を広げる
- ・遊びへの利用
- ・季節を感じる

〈野草（雑草）〉

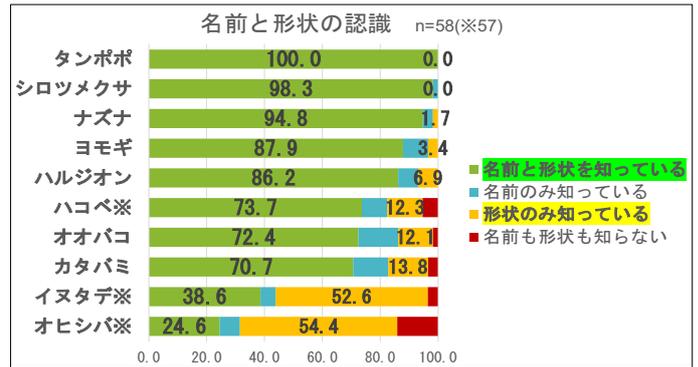
- ・遊びへの利用
- ・多様性を感じる

- ・従来型の①②の観点が中心、③④のような「環境教育的視点」（井上, 2009）は比較的意識されにくい

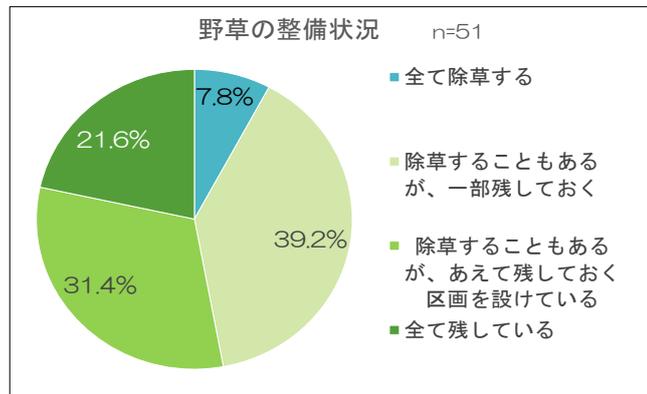


質問紙（東京都23区内の保育施設）

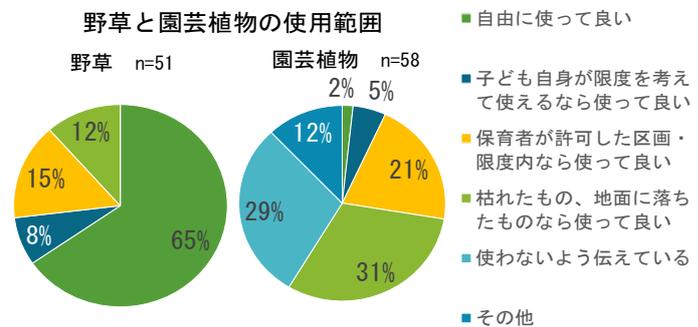
- ・10種の野草（雑草）の多くで、保育者はその名前と形状、または少なくとも形状を認識



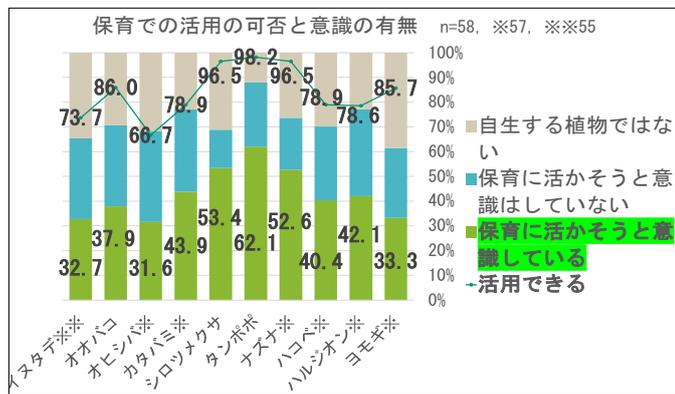
- ・全て除草する場合は少なく、一部または全て残すとの回答が多い



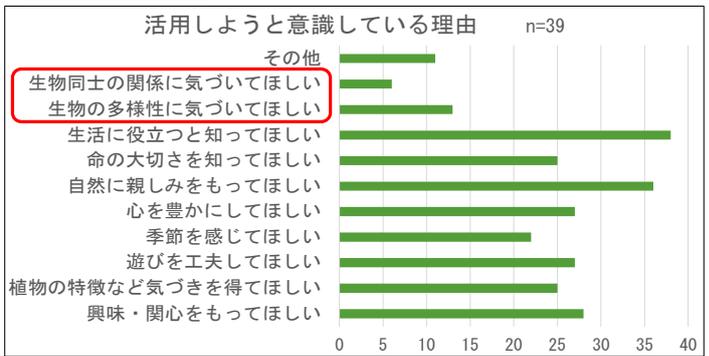
- ・野草（雑草）は「自由に使って良い」が最も多い
- ・園芸植物では「枯れたもの、地面に落ちたものなら使って良い」など何かしら制限のある回答が多くを占めていた



- ・どの野草（雑草）も「活用できる」との回答が6割以上
- ・実際に「活用しようと意識している」とする割合は減った



- ・活用しようと意識している理由の中で、従来型の観点到比べ「生態学的自然観」は意識されにくい（下図）
- ・実際の子どもの様子では、「ままと」「草花遊び」など遊びへの利用に関する回答が目立つ



6. 考察

- ・東京都23区内の保育施設では今回扱った野草（雑草）が保育者によく認識され、園庭環境の一部として残されている

- ・園芸植物と比べるとその認識や活用意識は低く、中でも地味で目立ちにくいものは特にその傾向にある

- ・多くの園で野草（雑草）は子どもが自由に摘める
→遊びに十分に利用できる素材として有用で、野草（雑草）活用の利点といえるのではないか

- ・活用意図の観点は従来型が多い

→しかし、野草（雑草）は生物同士の関係性や植物の多様性を感じるといった点（＝「環境教育的視点」）から、必要な存在であると認識している保育者もいた

⇒野草（雑草）の活用によって「環境教育的視点」が意識されるようになる可能性

7. おわりに

保育者が栽培植物・園芸植物・野草（雑草）の区別なく園内の植物を認識

「環境教育的視点」を含めたより多様な観点からねらいを立て活用していく必要

- ・今後の研究課題

→保育施設における野草（雑草）活用の課題やその解決策、活用法等について、活用実践の観察やインタビューで明らかにしたい

8. 引用文献

・大豆生田・出原大・小西貴士（2022）『あそびが学びとなる子ども主体の保育実践 子どもと自然』学研教育みらい、p. 12.

他、抄録参照